

部 長 小 島 修
研究主任 青 木 真梨子
部 員 数 28名

1 研究主題

子どもたちの命を守り、安全に生活できる学校を目指して
— 「これならできる!」「やってよかった!」と実感できる取組を通して —

2 はじめに

学校は、子どもたちの健やかな成長と自己実現を目指して教育活動を行うところであり、そのためには健康や安全への配慮を行う必要がある。そして、子どもたちが、生涯を通して健康課題に適切に対応できる資質や能力を育成することも求められている。したがって、学校においては『子ども』『教職員』『養護教諭』のいずれにとっても、救急処置は重要な能力・技能の一つであると言える。

そこで、本研究会では、昨年度までの3年間の研究において、『子ども』『教職員』『養護教諭』の救急処置における課題を改めて探るために、実態調査の実施・分析を行ってきた。そしてその結果に基づき、課題解決に向けた実践に取り組んできた。

その過程において、教職員の経験値や時間や環境等に左右されず、かつ子どもたちの行動化にもつながる『子ども』『教職員』『養護教諭』誰もが「これならできる」と実感できるような取組を目指すことこそが、今必要であろう。そして、実践の結果『子ども』『教職員』『養護教諭』ともに「やってよかった」と実感することができれば、学校が、子どもたちの命を守り、安全に生活できる場になると考えた。

そこで、今年度は、実態調査を再度実施し、前回の結果と比較することで、実践の成果を確認するとともに、さらなる課題の解決を「これならできる」「やってよかった」と実感できる取組によって目指すことにした。

3 研究経過

(1) 研究の仮説

ア 実態調査の結果を分析し、前回の調査結果と比較することで、さらなる課題が明らかになり、その解決方法がより明確になるであろう。

イ 実態調査の結果を踏まえた救急処置に関する学習会や事例報告会を行い、互いに学び合う機会をもつことにより、「これならできる」「やってよかった」と思える実践が広がり、救急処置に関する知識や技能が高まるであろう。

(2) 研究の計画

	実践内容	手だて	評価
令和 元年度	学校における救急処置の 課題の再検討	実態調査の実施、分析、 過去の結果との比較	調査分析による取 組内容の明確化、 部員による評価 (感想)
令和 2年度	実践の計画、実践	情報交換・事例検討会 学習会	
令和 3年度	実践、実践のふりかえり 研究のまとめ	情報交換・事例検討会 学習会	

4 研究の概要

(1) 子どもグループ

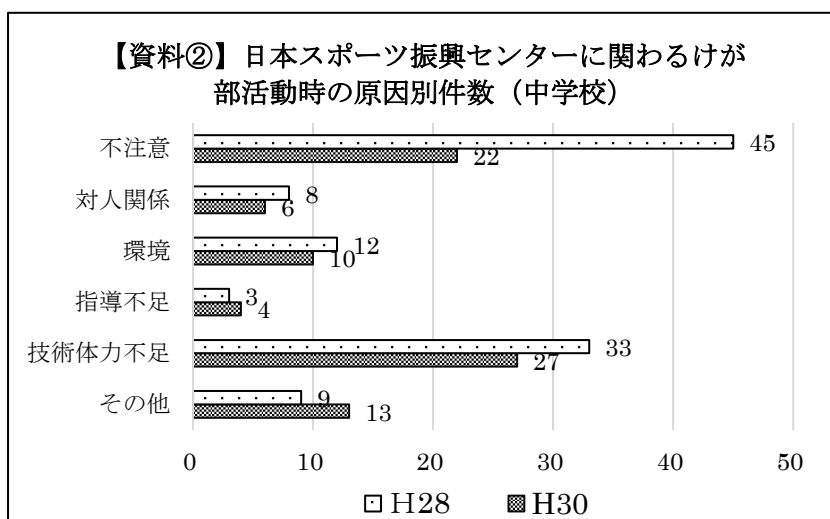
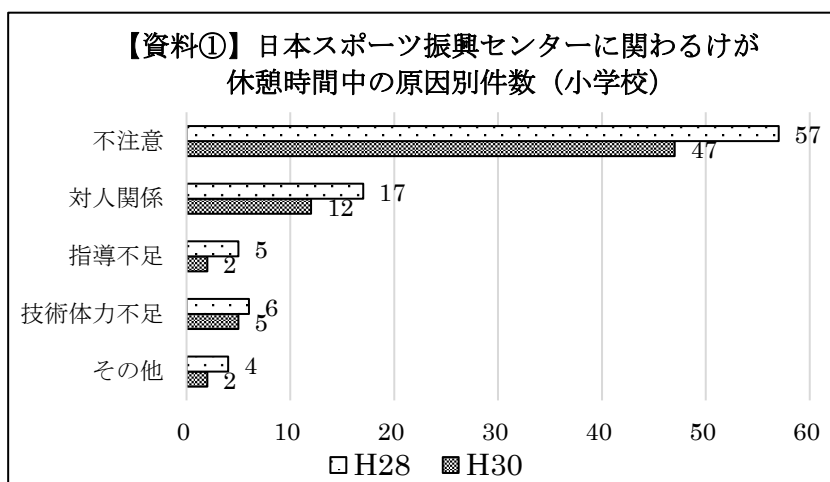
平成 28 年度の小牧市における日本スポーツ振興センターに関わるけがは、小学校では「休憩時間中の不注意によるけが」が、中学校では「部活動中の不注意によるけが」が多かった。また、平成 29 年度に行った、けが予防に関する意識調査で、小学校では「けが予防への意識は高いが行動が伴っていない」、中学校では、「けが予防への意識が低い」ということが実態として挙げた。

そこで、小学校では身体計測時の保健教育、中学校では学校保健委員会や部長会議、部活動時の健康観察の強化等に取り組んできた。

平成 30 年度の小牧市における日本スポーツ振興センターに関わるけがを分析し、前回の結果と比較したところ、小学校では「休憩時間中の不注意によるけが」の件数が 10 件減少した。【資料①】。

中学校では「部活動中の不注意によるけが」が 23 件減少した【資料②】。

令和元年 6 月～7 月に市内の小学校 6 年生 (1381 名)・中学校 3 年生 (1278 名) を対象とした意識調査を分析したところ、主な結果は資料③、④のようになった。



小学校では、「けがを防げる」と思う児童が増加し、86.3%となった。さらに、「隠れた危険を意識できている」と答える児童は 75.7%だった。しかし、廊下や教室で適切な過ごし方をしていると答える児童は増えなかった。運動場や廊下階段において、「ルールを守れていない児童を見かけたら声をかけることができる」と答える児童も 56%程度にとどまっている。

中学校では、「安全に行動している」と思う生徒が増加し、79.8%となった。しかし、「隠れた危険を意識している」、「準備運動をしている」と答える生徒は減少してしまった【資料④】。

昨年度までの実践において、小学校は保健教育の中で、けがが多い場所や場面の写真を提示し、普段の生活を振り返らせ、どうしたらよいかを考えさせたり、具体的なルールを再確認させたりした。これらのことにより、担任もクラスで指導する機会が増え、けがの減少やけが予防意識の高まりにつながったと考える。今後、どのような場面でも安全な行動ができるようになることや、自分だけでなく、周囲の人の安全についても配慮できるようになることが必要であると考えている。引き続き、安全に過ごすためのルールの意味や、学校全体でけがを減らすための工夫を考えさせるなど、児童が自ら考え、自他の安全を守れるようになるような継続的な保健教育に取り組んでいきたい。

中学校は、部活動の特性にあった準備運動を、体を動かしながら専門家から学び、部活動で実践したことがけがの減少やけが予防意識の高まりにつながったと考える。引き続き、準備運動について専門家の指導を受けるような機会を設けることで、顧問や部員の入れ替わりにも対応できるようにし、適切な準備運動の習慣化を目指したい。また、隠れた危険を意識できるように、けがが起きた後に、振り返る機会を設定して原因に気づかせ、それを行動化できるような取組を考えたい。

中学校は、部活動の特性にあった準備運動を、体を動かしながら専門家から学び、部活動で実践したことがけがの減少やけが予防意識の高まりにつながったと考える。引き続き、準備運動について専門家の指導を受けるような機会を設けることで、顧問や部員の入れ替わりにも対応できるようにし、適切な準備運動の習慣化を目指したい。また、隠れた危険を意識できるように、けがが起きた後に、振り返る機会を設定して原因に気づかせ、それを行動化できるような取組を考えたい。

(2) 教職員グループ

平成 29 年度に行った教職員対象の意識調査で、エピペン保有児童生徒に直接関わらない立場の教職員の危機意識が低い、エピペン対応時に司令塔の役割ができる教職員が少ない、記録の重要性への認識が甘いということが課題として挙げた。

そこで、エピペンシミュレーション研修の「モデル案」の作成、東海学園大学石田妙美先生を講師に招き、「モデル案」を活用した養護教諭対象の実践型研修会、各校でのエピペンシミュレーション研修に取り組んできた。

【資料③】意識調査結果（小学校）

質問項目	H29	R1
よくけがをする	44.4%	33.5%
自分の工夫や努力によってけがを防げると思う	77.8%	86.3%
廊下・階段を歩いている	72.8%	71.8%
教室で静かに過ごしている	84.2%	78.3%
運動場でのルールを守っている	97.1%	97.2%
隠れた危険を意識できている		75.7%
廊下階段で走っている人に声をかけることができる		56.2%
運動場のルールを守っていない人に声をかけることができる		55.8%

【資料④】意識調査結果（中学校）

質問項目	H 2 9	R 1
自分はいつも安全に行動している	72.7%	79.8%
運動の前に準備運動をしっかりとしている	93.8%	91.5%
隠れた危険を意識している	68.7%	62.4%

令和元年度、シミュレーション研修を実施した学校の教職員を対象に、どの程度、対応ができると思うか意識調査を行った。「エピペンを扱うこと」では、「できる」「まあまあできる」と回答した教職員が11.3%増加した。特に中学校で、エピペン保有者に直接関わりのない教職員の意識が向上した。

「司令塔の役割をする」では、「できる」「まあまあできる」と回答した教職員が8.8%増加した【資料⑤】。シミュレーション研修のモデル案では、養護教諭や管理職不在という設定

にすることで、少経験者も司令塔の役割を経験してもらうことができたこと、誰でもやるべきことが分かるように、色分けやイラストなどを工夫した「役割カード」を作成し、司令塔として何をすればよいのかをカードを見て分かるようにしたこと

ことで、自信をもって対応することができたからだと考える。

「傷病者の記録をとる」では、「できる」「まあまあできる」と回答した職員が7.9%増加した。何を記入すればよいのかが明確な記録用紙となるように工夫したことや、記録は全体での情報共有の手段になっていると伝えたことで、記録が重要であるという意識が高まったためだと考える。

各校でのエピペンシミュレーション研修後、教職員からは下記のようなふりかえりがみられ、役割カードを活用することで「これならできる」と感じた人が多くいた一方で、新たな課題に気づき、不安を感じた人もいた。

【各校での研修後のふりかえりより】

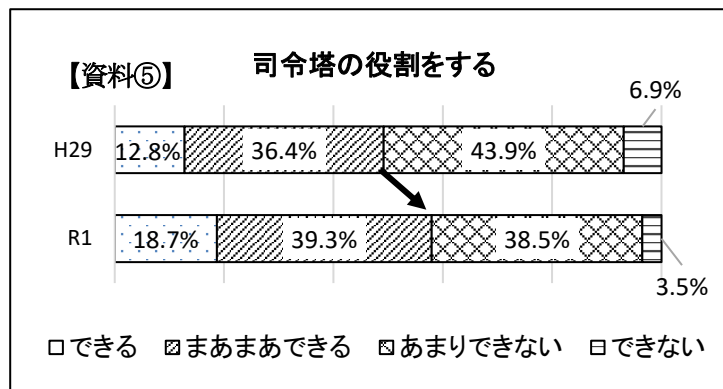
- ・何をやればよいカードを見ると分かるので安心である。
- ・分かりやすい場所に置いて周知できるとよい。
- ・1年に1回はシミュレーション研修を行えるとよい。
- ・記録には、スマートフォンのボイスレコーダやカメラ機能が役に立つ。

今後も、実践についての情報交換会で、工夫点や改善点を出し合い、さらに効果的な研修の在り方を探るとともに、教職員が「これならできる」と思える研修を積み重ねていきたい。

(3) 養護教諭グループ

平成25・27年度に愛知県の養護教諭（名古屋市を除く公立小中学校）を対象に行われた救急処置活動の実態調査を参考に、小牧市内の養護教諭に調査を実施した（平成30年）。その結果、病院受診か否か判断に迷った症状・訴えとして多かったのは、1番目「頭を打

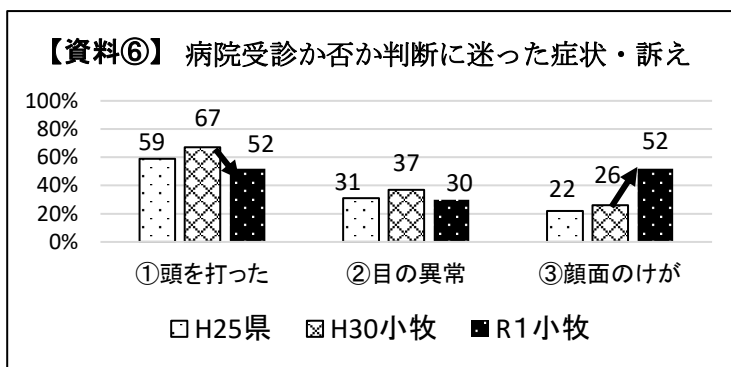
<エピペンシミュレーション研修>



った」、2 番目「目の異常」、3 番目「顔面のけが」となった。

そこで、病院受診か否かの判断に最も迷う「頭部打撲」について、前述の石田妙美先生を講師に招き、市内の養護教諭を対象にシミュレーション研修を実施した。シミュレーションは、市内で実際にあった事例で行った。事前に、アセスメントの際に確認すべき項目を明確にした「頭部打撲アセスメントシート」を作成し、シミュレーションに活用した。その際、「頭部打撲アセスメントシート」を使用し、的確にアセスメントして対応できているかどうかを確かめ、石田先生の指導を受けた。

研修後、実態調査を行い、平成 30 年度の結果と比較した。病院受診か否かの判断に迷った症状・訴えとして最も多かった答えは、前回と同様「頭を打った」であったが、前回より割合が減った【資料⑥】。頭部打撲アセスメントシートを作成し、研修で使いながらシミュレーションを行ったことで、自信が高まったと考えられる。一方で、



「顔面のけが」の対応への不安が高まった。これは、シミュレーションの中で、頭部打撲と顔面のけがに対応する事例を取り上げたことと関連があると考ええる。今まで市内では、顔面のけがの対応について学ぶ機会が少なかったため、改めて研修の機会を持つ必要があると考ええる。

今後も、自信を持って救急処置をするために、アセスメント技術向上のための研修やアセスメントシートの作成を行いたい。また、知識・経験の共有を図るために、事例検討会の実施を計画していきたい。

5 今後の課題

今年度は実態調査を行い、実践についての成果と課題を分析した。今後は分析結果を共有し、学び合いながら、課題解決に向けて下記のように取り組んでいきたい。

子ども …… 保健教育・部活動の部長会議などを継続し、けが予防に関する意識の向上と行動化を目指す。

教職員 …… 実践について情報交換会を行い、工夫点や改善点を出し合い、さらに効果的な研修の在り方を探るとともに、繰り返し研修を重ねることで、実践力の向上を目指す

養護教諭 …… アセスメント技術向上のための研修やアセスメントシートの作成を行う。事例検討会の実施を計画することで、知識・経験の共有を図る。

※参考文献：愛知県養護教諭研究会による調査研究（平成 25・27 年度）